

# 存在の逆説／言語の逆説

— 〈社会性〉の始原—

周 藤 真 也

## 要旨

精神療法における転移と呼ばれる現象は、精神疾患の治癒の契機であるとともに、〈社会性〉の始原である。しかし、転移性恋愛の場合には、それが治癒の契機でもあるにもかかわらず、〈性〉や〈性愛〉の問題が〈個人的なもの〉として扱われる現代社会においては、精神療法において扱うことを困難にさせている。本論文では、この困難を乗り越えるために、転移や恋愛という現象にみられる関係性の問題——そこには、自他未分化の「鏡の段階」(ラカン)や、対象関係(クライン)の問題などが含まれている——に注目する。そして、この困難を乗り越える方法として、ある治療的実践において試みられた方法と、ある楽曲の歌詞に注目する。これらから抽出することができる承認と拒絶の不可分性は、一方では自己の存在というものが、他者からの指し示しによってのみ可能であるという承認の問題(存在の逆説)と、他方では承認についての指し示し(言葉)が、その承認そのものではないという拒絶の問題(言語の逆説)を浮かび上がらせる。この困難を乗り越えるためには、こうした承認と拒絶との不可分性をコミュニケーションの中で不断に実現していく必要がある。

## 1. あるフィールドの経験

十数年前、私は、ある精神科クリニックのデイケアにおいて、約半年間にわたって参与観察を行ったことがある<sup>1)</sup>。そのクリニックにおいて、私は「研究生」という肩書で、スタッフ見習いのような形でデイケアの活動に参加していた<sup>2)</sup>。デイケア(day clinic)とは、日中にレクリエーションなどの活動を行い、参加者同士の交流を行う場であり、介護を必要としたり認知症をもったりしている高齢者を対象とするものと、精神疾患を患った

---

1) 私はこの精神科クリニックでのフィールドワークについて、その成果をこれまで学会はおろか研究会等を含めて一切発表してこなかった。私が当時、こうしたフィールドワークを行っていたことは、当時大学院生であった私の指導教官や研究仲間などごく一部にしか知られていない。

2) 週1日(金曜日)、月2~3回程度参加する形で参与観察を行った。

「患者」の予後を対象とするものに分けられる。後者は、国や公立の機関、医療機関、保健所、地方公共団体によって行われており、このうち精神保健福祉センターや公立のデイケアセンター、医療機関で行われるものは、医療保険の対象となり診療報酬が支払われる。精神科デイケアの場合、自宅等に引きこもりがちになる「患者」に対して、集団的な活動を行う機会を提供することを通して、「社会復帰」や入院予防が図られるものである。作業療法を行う「共同作業所」などとも連携しながら、精神病院への入院と「社会復帰」の両極に対する「中間施設」のひとつとして位置づけることができるものであり、日本では1970年代初頭から試行がはじまり、全国に広がっていった(村田・浅井(編)1996)。

私が参与観察を行ったのは、特急列車も停まるJRの駅から徒歩10分程度の場所の町中にある小さな精神科クリニックであった。周辺は住宅を中心に小さな町工場などがあり、大通りには商店が点在していた。クリニックは4階建てで、1、2階が外来患者用の診察室となっており、3、4階をデイケアの施設として利用していた。

デイケアは、平日(月曜日から金曜日までの週5日)の午前9時半から午後4時前まで行われており、毎回20～30名程度の「患者」が通ってきていた。プログラムとしては、グループでの話し合いをしたり、料理を作ったり、スポーツ活動を行ったり、美術館や博物館に行ったり、ハイキングをしたりなどがあったが、これらは参加者の話し合いを通して、決めていくことになっていた。デイケアを担当していたのは、看護師(当時の呼称では「看護婦」)1名と、3名の精神科ソーシャルワーカー(PSW: Psychiatric Social Worker)<sup>3)</sup>(男性2名、女性1名)であった。

このクリニックにおけるフィールドワークにおいて、当時の私は、敢えて詳細なフィールドノーツをつけるようなことはしなかった。というのも、このフィールドワークの目的が、参与観察したものをエスノグラフィーやモノグラフ的に記述するよりも別のところにあったからである<sup>4)</sup>。当時、私が、このクリニックの院長である医師<sup>5)</sup>に対して提出した

3) 当時の日本において、精神科ソーシャルワーカーの資格制度はまだ発足していなかった。精神科ソーシャルワーカーの国家資格「精神保健福祉士」の制度ができるのは、1997年のことである。

4) このことは、当時の日本の研究状況において、精神医療の領域においてエスノグラフィー的な記述を行う仕事をしようとするならば、その意義と位置づけにおいて、微妙な問題が生じたであろうことと関係していたと思われる。たとえば、ゴッフマンの『アサイラム』(Goffman 1961 = 1984)が、社会学における相互行為分析の書物としてだけでなく、精神医療批判の書としても読まれたように、精神医療におけるエスノグラフィー的な記述は、精神医療批判あるいは精神医療を「告発」する言説と結びつく歴史をもっていた。このことは、日本においても朝日新聞記者大熊一夫における『ルボ精神病棟』(大熊 1973)のように、ジャーナリストによるルポルタージュに形式を取って同様のことが行われたところに見てとることができる。

しかしながら、1960年代から当時の西側先進諸国において広がっていった精神医療批判や反精神医学の運動(周藤 1997)は、精神医療改良運動となって具体的に精神病院を開放する成果をもたらして行ったことも事実である。精神科デイケアもこうした精神病院の開放の成果であり、改良された精神医療の在り方や、精神障害者に対する福祉の在り方として、積極的かつ肯定的に評価すべきであるという雰囲気が強く支配することとなった。さらに、調査方法論的な主題から言えば、エスノグラフィーをはじめとするフィールドワークの成果の記述において、研究者が予め特定の枠組みをもって現場を捉えるよりも、現場で起きている現象からの理論構築、あるいは現場の人々のそれぞれの世

研究計画書には、分かり易くまとめ直すとすれば、次のような事柄を書いていた。精神医療における治療（cure）とは何か、治療（cure）とケア（care）はどのような関係性にあるのか、寛解の過程で〈社会的なもの〉はどのように個人の中に織り込まれていくのか。すなわち、精神医療、特にデイケアなどを含む広義の精神療法において、治癒のもつ本質と、〈社会性〉の起源をテーマに据えていたのである。

このことを今、改めて考えるため、私が、Aクリニックにおいて、参与観察をはじめた最初の日に遭遇したある出来事を題材とすることにしたい。その日のデイケアが終わり、参加者が帰った後、スタッフはミーティングを行って、その日に起こった出来事などの情報の共有や反省点を確認し、必要に応じてカルテに記載していく作業を行う。その日のスタッフミーティングにおいて話題となっていたのは、デイケアに通ってきているB君（当時10代後半）が、PSWのCさんに対して好意を抱いており、そのB君の行動をめぐる問題が話題となっていた。ここでは、B君の行動を「問題行動」として定義し、それに対処しようとする「常識的な」対応がミーティングで議論されていた。

ところで、デイケア療法も広義の精神療法の一つであると捉えるならば、精神療法の現場においては精神疾患からの寛解の局面において、こうした現象が起りやすいことはよく知られている。精神分析学であれば、フロイトは、転移性恋愛（Freud 1915 = 2010）として定式化しており、精神疾患からの回復における陽性転移の一種であると考えられている。

精神療法において、転移とは患者と治療者との間の関係を構成する現象の総体となりうるとともに、治療過程における治癒の契機である（Laplanche & Pontalis 1967 = 1977:

---

界観をそのまま受け入れて多元的に記述する「羅生門的手法」へとシフトしてきたことともまた関係している。だがそのときには、精神医療改良運動にみられる治療者-患者という役割関係を無化しようとする志向とも相まって、治療者もまた現場を構成する重要な当事者として取り扱われることによって、記述が治療者の世界観に支配されやすくなる。さらに、治療的な関係性や精神疾患のもたらす性質上、「患者」たちは、実際さまざま不満を述べつつも、医師やスタッフなど治療者の指示や世界観に従いやすい。こうしたことから、もし精神科デイケアの世界を記述しようとするならば、改良された精神医療を肯定する記述と結びつきやすい状況があったのである。

精神療法改良運動が進化した中での精神医療の現場における参与観察と、エスノグラフィー的な記述の試みとして山田（1986, 1991）の仕事を挙げることができる。そこでは、精神病院の開放を評価しつつも、消去することができない治療者-患者間の非対称の関係性は、依然としてゴッフマンが描いたような状況を作り出すことを指摘していた（山田1986）。今から思えば、そうした記述が可能であったのは、山田が精神病院を対象として記述したことが大きかったように思われる。精神科デイケアにおいても同様の記述をすることは、不可能ではなかったが、肯定的に評価されるべきであるとする主流の考え方と真っ向から対立することになる。精神障害者に対するケアの言説へと置き換えていくことを通して、精神医療批判の言説は、当時においてもすでに「時代遅れ」のものとなるようになってしまっていたのである。

しかし、そこには精神疾患が「治る」ということとは、異質な空間があるとも考えられる。「中間施設」は、今度はそうした施設に依存する人々を作り出す。逸脱行動論において、「逸脱者」というレッテルを貼られた人々が、逸脱的アイデンティティを身に付け、逸脱的ライフスタイルを構築するように、精神障害者として生きるよう強制するような〈力〉が働く場が、生じていくのである。

- 5) フィールドワークにおける受け入れ側の人物、調査論的に言えば「ホストパーソン」ということになる。

332f)。とするならば、先に挙げたスタッフミーティングでB君への対応で話し合われた内容は、実のところは「治療の失敗」あるいは「治療の放棄」とも言うべきものになっている。言い換えれば、B君がスタッフであるCさんに抱いた好意は、B君の「治療への意志」ともいうべきものであって、これを利用することもできたかもしれない。そうした観点からすれば、Aクリニックのデイケアのスタッフたちは、折角の治療のチャンスを見すみす逃していたとも言えるのである<sup>6)</sup>。

## 2. 転移と対象関係をめぐって

先に上げた事例を、かりに「治療の失敗」であると捉えるとしても、もちろんその責任はスタッフのひとりであるCさんが負うものであるというよりも、うまく対応することができなかったスタッフ全体あるいは、社会の側の責任として考えなければならない<sup>7)</sup>。たとえば、看護師やPSWといった専門家が、専門的な知識をもち、こうしたケースに対応できる技術と経験を身に着けるといったことが考えられる。

しかしながら、転移性恋愛を治療の実践に活かすことは、〈性〉や〈性愛〉が〈個人的なもの〉の側に位置づけられる傾向をもつ現代社会において、困難を伴っている。精神分析学においてですら、転移性恋愛は、治療を断念せざるを得なくなるような〈危険なもの〉としての位置を与えてきた(Freud 1915 = 2010; 成田 1981, 1994)。そのことを背景として、こうしたケースへの対応は、一部の専門家は関心を示してきたとしても、専門的な知識や技術としては、十分には検討されることなくきたように思われる。だからこそ、先に上げた事例に見られるように、そうした場面に遭遇したスタッフは、「常識的」な対応をすることによって何とかやり過ごそうとする。

ここには、発想の転換が必要になる。そもそも〈性〉は、個人を超えた存在の問題であって、そうした点においていえば、〈個人的なもの〉とはまったく反対の極に属するものである。〈性〉や〈性愛〉をめぐる因習が障害になっているならば、それらを〈社会〉の側の問題として考えることは当然のことである。だが一部では以前よりすでに常識的な対応の中で、こうした問題には対処してきたと思われる。成田が指摘したのは、転移性恋愛への対応について、「苦しい忍耐のすえにようやく到達する男性治療者」に対して、「意識的には何の努力もなく易々とこの領域に到達」してしまうような「治療者-患者関係を作る能力に長けている」女性治療者が多く存在しており、少なくとも一時期は患者を安定さ

6) このスタッフミーティングにおいて意見を求められた私は、「間がない」という婉曲的な表現で、B君への対応について違和感を表明するのが精一杯であった。私はB君に対して、「治療的距離」を取りつつ、別の仕方によって対応し、世界を再秩序化していく可能性を検討するべきではないのかと考えたのである。

7) この点において、私は、障害学でいうところの「障害の社会モデル」に立っている。

せることに役立っていたことである（成田 1991 → 1996 : 96）。

実のところ、フロイトにおいてですら、転移性恋愛は、「たいていの場合、困難な状況を克服し、弱まるか『態をなさなくなった』恋着を相手にして分析作業を続行することに成功するようになる」（Freud 1915 = 2010: 320）という。あるいは、成田（1981）であれば、転移性恋愛が患者側に起きていた場合、医師はまずもってその原因を自らの側に追及しなければならないというであろう。その上で、患者に対して医師は、患者に恋愛感情があることを認め、それに苦しむ患者に共感を示しながら、そのような感情が医師に対して向けられることに関しては、認めることはできないという点を明らかにし、恋愛感情が、実際には他の感情の表現でないかについて検討し、もしそうであれば患者にこれを指摘し、患者自身にこの点を検討してもらうことが、転移性恋愛における医師が取るべき適切な対応であるとした（成田 1981 → 2007 : 160-164）。

だが、数少ないけれども、「危険性」を意識しつつ、転移性恋愛を治療の実践に活かした事例がないわけではない。たとえば、渡辺（1986）が記述したのは、重篤な統合失調症（当時の呼称で言えば「精神分裂病」）患者に対して、「手を握る」という実践において、その容態をある程度まで回復させた事例である（渡辺 1986 : 167-204）。そこで記述されるのは、対象者との面接の際の「手を握る」という穏やかな実践が、転移性恋愛を引き起こし、それが患者の快方に向かわしめた可能性である<sup>8)</sup>。しかし、反精神医学の旗手であった D・クーパー（Cooper, David）らが試みたセックス・セラピーのように、オーガズムを治療に活かすラディカルな実践になってくると、転移性恋愛を引き起こさない可能性があるという点において、ショーウォーターが指摘したようにレイプの相をもつことは否めない（Showalter 1985 = 1990: 322）。

ところで、先に触れたように精神分析の教えによれば、転移（transference）という概念は、精神療法における患者との関係性の変化すべてを表す用語としての性質もっている。このことを前提とすれば、治療的關係性のもとで生ずるすべての変化は、転移という概念のもとに集約することができる。しかしながら、転移という現象の本質をみた場合、転移性恋愛として描かれてきた事態はもっと複雑ではないのか。すなわち、誰かが誰かに対して転移するということは、それが本来的には「恋愛」という形式をもつことさえ難しいのではないのか。そこで、たしかに因習的な「恋愛」という形式をとることは往々にしてある。先にあげた B 君の事例は、誰もが「転移性恋愛」とであると断定してしまうような事例である。

しかし、渡辺（1986）に描かれたような事例はどうか。ここに挙げられている事例、す

---

8) 実際、渡辺はこの「触覚的に触れ合う」という試みを、「危険な歩み」という認識のもと、極めて慎重な判断の下に行っている（渡辺 1986 : 182）。ここで重要なのは、はじめからそこに転移性恋愛があったというよりも、「手を握る」という行為が、転移性恋愛を引き起こさせたと思われることである。なお、渡辺が扱っているこの症例については、周藤（1996）で検討を行っている。



なわち先に「穏やかな実践」として紹介した事例は、当人においてですら、自らの恋愛感情にはじめは気づかない可能性すらあるような「穏やかな転移性恋愛」である。ここで、ラカンの「象徴界」「想像界」といった用語を使用するならば、B君の事例が、「象徴界の秩序」に絡め捕られた中で生じた、言い方を変えると極めて世俗的な「転移性恋愛」に見えるものであるとするならば、渡辺（1986）に描かれた事例は、「想像界」における「転移性恋愛」であるとも言うるかもしれない。

ここでは後者の性質に注目しておきたい。なぜ、「想像界」における「転移性恋愛」が重要なのか。それは、それが「恋愛」という形式すら不確かなところにあり、かつ転移そのものの性質を示すからにはかならない。たとえば、恋愛という現象において、相手に対して自身との同一性を見出すとき、一種の転移の現象とその経験にはかならない。つまり、そこにあるのは、相手との対象関係（object relation）の問題、言い換えると、自他未分化の状態が生ずることである。つまり、ラカンの言う「鏡の段階」の経験なのであり、「想像界」の問題、自我、言い換えれば自己アイデンティティの成立の問題であるということなのだ。別の言い方をすれば、自他未分化の状態において、それをたとえば「恋愛」という特定の形式でもって指し示すことはできない。

われわれは恋愛という現象が、「想像界」においては本質的に転移現象であり、対象関係の問題であることを確認した。それに対し、「想像界」における「転移性恋愛」はどうなるか。それは、同様に対象関係の問題であることはいうまでもない。しかし、ここでは先に確認したような「穏やかな転移」においては、「恋愛」という形式をもつことは本質的ではない。翻っていえば、「想像界」における恋愛という現象は、「恋愛」という形式をもつことすら本質的ではないのである。

B君の事例というのが、精神科デイケアの現場において、「問題のある」転移性恋愛であるとみなされたこと。しかし、それが「問題のある」ものなのかどうか、それ自体が「象徴界の秩序」の中で決定されるものである。だからこそ、本来的にはそれは未決定のものではないのか。もし、B君のようなケースにおいて、それを「治療への意志」として、治療的实践に活かすとするならば、まさにそれを承認するところからはじめなければならない。

上記に述べたような恋愛観、言い換えれば「想像界」における恋愛の問題は、恋愛というのが優れて象徴界の秩序の中で組み立てられたものであることしか見てこなかった、従来の恋愛論に対しても、一矢を放つものになるだろう。恋愛という現象が、西洋において宮廷恋愛を系譜にもつとともに、遊戯としての性質をもつ一方、社会制度としての婚姻と結びつくことを通して、扶養などの実生活上の問題とも絡んでいくことは周知のことである。しかし、その遊戯性は、性愛行動において、他方ではさまざまな退行の現象や依存、関係の急激な性欲化、「対幻想」（吉本隆明）などを引き起こす。そこでは、「象徴界の秩

序」に絡め取られながらも、まさに「想像界」のことがらが問題となるのであり、事実問題として鏡であるということである。

### 3. ひとつの解決策

社会学は「象徴界の秩序」から自由であることを標榜してきた数少ない社会科学のひとつである。このことは、社会学が対象とする世界が、因習に支配された世界であることとも関係している。社会学が、「一般的なものの見方とは異なった観点から対象に光を当て照らし出す」とき、もちろんこのことは社会学の特権であるというよりも、学問が真理の探究をめざすものである限り、さらに呪術からの解放をめざす近代科学においては、当然のことがらである。それとともに、科学は〈夢〉という性質をもつ。科学が〈夢〉であるならば、そうした性質をもつ社会学こそが〈夢〉の学問に相応しい。しかし、その〈夢〉は、「象徴界の秩序」から自由になる以上、まさに「想像界」における出来事に即して記述する必要がある。

明らかになった問題とは、自他未分化の状態から、どのように自我を形成するのかという、個人にとっての〈社会性〉の始原の問題である。実はその回答と解決策は前章においてすでに記してある。この章では、その解決策のもつ構造を、ある楽曲の歌詞に注目することによって、別の形で引き出すことを試みることにしたい。ここで注目したいのは、倉木麻衣の「Your Best Friend」(2011)という楽曲の歌詞である。この楽曲は、発売元によれば、「言葉にしなくても想いは伝わっているという深い絆を歌ったミディアムバラード」であると説明された<sup>9)</sup>。

まず、この楽曲の歌詞は、誰が誰に対して発したメッセージであるのか。相手のことを「君」と呼び、自分のことを「私」と呼ぶこの歌詞の主人公は、「You're my boyfriend」という歌詞から、女性らしいことがわかる<sup>10)</sup>。

次に、「君」と「私」との関係性であるのだが、歌詞の内容や、「You're my boyfriend」という言葉から、一見、恋人関係にあることをうかがわせる。しかしながら、どうもそうではなさそうなのだ。それは、「今は遠く離れていても」という言葉や、二番になると「You're my best friend」という言葉に変わることもから、かつて恋人関係にあったか、少なくとも現在は恋人関係にはないことを予想させる。このあたり、「boyfriend」という語が、米国等では俗語として恋人関係を意味することを知っていれば、日本語の「ボーイフ

9) この楽曲は、NORTHERN MUSIC から、2011年10月19日に発売された同名のシングル CD に収録されている。タイアップとして、日本テレビ系アニメ『名探偵コナン』エンディングテーマとしても使用された。作詞は、倉木麻衣・GIORGIO 13の共作、作曲・編曲は、GIORGIO CANCEMI (作詞者である GIORGIO 13の本名であり同一人物) とされている。

10) この言葉がなければ、主人公は異性愛男性であってもおかしくない。

レンド」が必ずしも恋人関係を意味せず、直訳の「男友達」に至っては、恋人関係にはない「普通の」友達を意味することとの対照関係を巧みに利用していると読むことは容易だろう。

この楽曲のサビの部分の歌詞は次のとおりである。

その想いは届いてるよ／胸の奥に響いてるよ／言葉に出さなくたって／I know your heart そばにいるよ  
今は遠く離れていても／胸の声は聞こえてるよ／言葉に出さなくてもわかるよ／ずっと You're my best friend

この楽曲の歌詞に対して、この歌手のあるファンはブログに、「『離れてしまった恋愛』をモチーフにした歌詞」「普通に歌詞を読んでいる限りは、友達ではなく、明らかに恋人への歌です」と綴っている<sup>11)</sup>。たしかに、発売元からの説明のように「深い絆」という点ではそのように解釈することができなくもない。しかしながら、上述したように、事情があって別れてしまったか、一緒にいることができない二人の関係性を記述していると読むことのほうが妥当であるように思われる。

それだけでなく、この歌詞の中には、主人公である「私」の「君」に対する深い拒絶を読み取ることも可能だ。それには、先にあげたサビの部分を中心とした、この歌詞の特有の強さ、強すぎるくらいの強さが根拠となる。確かに歌詞というものの性質として、伝えたい言葉やその内容を強調するということはあるだろう。しかし、過度で不自然な強調は、むしろ自らを否定しているのではないかという疑念を生じさせるものとなる。

「深い拒絶」と「深い絆」とが近接することは、何も不自然なものではない。例えば成就することができなかった恋愛関係は、深い絆があるとしても、互いにそれぞれの生活がある中で、恋愛感情が必要以上に再燃することがないようコントロールすることになるのは当然である。

ところが、この歌詞の主人公は、「君」の「想い」を理解しているだけでなく、自らも「思い続けてるよどこにいても／心はつながっているから」「信じあっているから大丈夫」と主張する。

その強すぎるくらい強い主張は、それに対する疑念を湧き起こすのに十分である。なぜなら、離れてしまったけれど今も「私」に対して想いを寄せる「君」を論していると解釈することもできるからだ。このことは、一番の歌詞で「You're my boyfriend」であった部

11) ファンブログ：とっち「倉木麻衣 37th Single『Your Best Friend』発売」『麻衣ちゃんと一緒に!!～倉木麻衣をささえていこう～』2011年10月19日付、<http://blog.livedoor.jp/totti1982/archives/51419490.html> (2012年5月16日閲覧)。



分が、二番の歌詞で「You're my best friend」に言い換えられることでもうかがうことができる。

さらに、この楽曲のタイトルが「Your best friend」となっていることには、注目する必要があるだろう。このタイトルは、全く同じ発音になる「Your」と「You're」が掛け合わされており、スペルミスをしたり、敢えて「誤記」を用いたりする英語圏の若者もいるくらいだから、どちらの意味にもなりうるということを巧みに利用していると考えられる。歌詞の中では、「君」は、「私」の「best friend」であると歌われているが、「君」にとっての「best friend」は誰か、ということ言えば、歌詞の本文中ではまったく触れられていないけれど、当然ながら「私」ということになるだろう。この楽曲のタイトルは、そのことを暗に指し示すことになるのである。

このことは、この歌詞の主人公である「私」が、〈性愛〉を超えたところに、〈友愛〉があることを指し示していることを意味する。だから、リテラルな（文字通りの）意味に対して、その「胸の奥」に隠された真意として、「深い拒絶」があるとしても、それを前提として、リテラルな意味にも依拠することができる。「so you can lean on me」という歌詞は、「だから、私を頼りにしてもいいのよ」といった意味になろう<sup>12)</sup>が、リテラルに受け取ってもいいけれども、「私」に対して想いを寄せることの承認、すなわち「私を想い続けてもいいのよ」という意味であるならば、「拒絶」として受け取ることができる。そして、「君」が求めているのは、そうした「拒絶」を含んだ「承認」であるかもしれないのである。

主人公である「私」の真意はわからない。この楽曲の歌詞は、二つの可能性を指し示している。素直に文字通りの意味で「深い絆」を読むこともできるし、そうした「深い絆」が虚構のものである（かもしれない）という指し示しも為される。しかし、「私」の真意が、後者であるとしても、この歌詞が指し示すのは、まさにこうした世界観が提示する癒しの機能をもつ可能性であり、この楽曲が果たすべき役割は、こうした世界観が提示する癒しであるように思われるのだ<sup>13)</sup>。

12) lean onには「寄りかかる」といった意味もあるから、若干の性的な意味を想起させるとともに、単に甘えてもよいという意味にも受け取れる。

13) 何の証拠もないが、本楽曲の歌詞の世界観には、2011年の日本社会を襲ったあの出来事によってもたらされた「特殊事情」が反映しているように思われてならない。私が、本論文で述べた解釈が可能であることに気づいたのも、この「特殊事情」と関係している。そうした意味においては、この歌詞の世界観には、〈死〉が介在しているとともに〈死〉の相を伴っている。それは2011年の日本社会を覆った一大テーマが〈死〉の承認であったからだ。なお、倉木は2011年のあの出来事に関してチャリティー活動を行ったアーティストの一人であり、チャリティーソングを発表している。

#### 4. 存在の逆説／言語の逆説

前々章では転移性恋愛についてのフロイト (Freud 1915 = 2010) や成田 (1981) についての議論、渡辺 (1986) で試みられた治療的实践に言及した。前章では倉木麻衣の楽曲の歌詞を取り上げることを通して、承認と拒絶とが不可分である可能性について検討した。最後に、これらのことがすべて同じ現象であることを確認するとともに、そこではなにが生じているのかを確認して、本稿を結ぶことにしたい。

いまや本論文の主題は、次のように言い換えることができるだろう。自他未分化な「鏡の段階」は、いかにして「象徴界の秩序」を獲得しうるか、と。

ここには、次の二つの問題が介在している。

第一に、私の存在は、単独の私によって指し示すことはできない。私の存在というのは、何者かからの指し示しによるものである。これが承認の問題である。この問題にかかわるパラドックスを「存在の逆説」と呼んでおくことにする<sup>14)</sup>。

第二に、存在を指し示すために使用するものが「言葉」であり、言葉によって指し示すことを「記述」と呼ぶとすれば、存在はそのモノの存在それのみによって、記述することはできない。言い換えれば、言葉は、その言葉によって指し示されるところの存在物そのものではない。例えば「犬」という言葉は、その言葉によって示される犬そのものではない。これが拒絶の問題である。この問題にかかわるパラドックスを「言語の逆説」と呼んでおくことにする。

われわれが確認したのは、この困難を乗り越えるためには、こうした承認と拒絶との不可分性を実現する必要があるということである。では、どこでどのようにして実現するのか？ —少なくとも、今ここで確認しておきたいのは、それはコミュニケーションの中で実現されるということである。

長谷 (1996) は、コミュニケーションのもつ遊戯性を指摘する。G・ベイトソンが、子ザルの遊びの実践の中に見出したように、遊戯における表出は、その表出が示すところのリテラルな意味を意味するのではない (長谷 1996: 57)。われわれが問題としてきた状況は、こうした遊戯とは対極の「真面目な」状況を呈している。だからこそ、そこに持ち込まなければならぬのは、長谷が指摘するような遊戯性ではないのか。なぜなら、その状況の「真面目さ」とは、他者の表出を字義通りに解釈することによってもたらされるものであるからだ。

---

14) 周藤 (1996) が、渡辺 (1986) の症例を使って議論したのは、まさにこのことであった。

## 文献

- Freud, Sigmund 1915 „Bemerkungen über die Übertragungsliebe.“ = 2010 道籐泰三（訳）「転移性恋愛についての見解」『フロイト全集 第13巻』：309-325、岩波書店。
- Goffman, Erving 1961 *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, Doubleday & Company. = 1984 石黒毅（訳）『アサイラム——施設被収容者の日常世界』誠信書房。
- 長谷正人 1996 「遊戯としてのコミュニケーション」、大澤真幸（編）『社会学のすすめ』：37-61、筑摩書房。
- Laplanche, Jean & J.-B. Pontalis 1967 *Vocabulaire de la psychanalyse*, Presses Universitaires de France. = 1977 村上仁（監訳）『精神分析用語辞典』みすず書房。
- 村田信男・浅井邦彦（編）1996『精神科デイケア』医学書院。
- 成田善弘 1981『精神療法の第一歩』診療新社。→2007（新訂増補）金剛出版。
- 1991「青年期患者と接する治療者について」、成田善弘（編）『青年期患者の入院治療』金剛出版。→1996『心と身体 of 精神療法』：71-97、金剛出版。
- 1994「精神療法の失敗について」『季刊精神療法』20（3）。→1996『心と身体 of 精神療法』：59-70。
- 大熊一夫 1973『ルボ・精神病棟』朝日新聞社。→1981朝日文庫。
- Showalter, Elaine 1985 *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830-1980*, Pantheon Books. = 1990 山田晴子・藪田美和子（訳）『心を病む女たち——狂気と英国文化』朝日出版社。
- 周藤真也 1996「身体がいま-ここに在ること——身体 of 社会性をめぐる一考察」『年報筑波社会学』8：25-44。
- 1997「反精神医学と家族、あるいは人間へのまなざし」『現代社会理論研究』8：65-80。
- 山田富秋 1986「『一ツ瀬病院』 of エスノグラフィー——開放化を实践している精神病院に1週間滞在して」『解放社会学研究』1：62-74。
- 1991「精神病院 of エスノグラフィー」、山田富秋・好井裕明（編）『排除と差別 of エスノメソドロジー——[いま-ここ] of 権力作用を解説する』：179-212、新曜社。
- 渡辺哲夫 1986『知覚 of 呪縛——病理学的考察』西田書店。→2002ちくま学芸文庫。

\*フィールドワークを行った精神科クリニックは匿名とした。そのため、当該クリニックにおけるデイケア of 実践を紹介するいくつか of 記事を参照しているが、文献リストでは省略している。

\*本論文 of 発想は、1995年10月28日に開催された自我論研究会（於・早稲田大学）における同名 of 研究報告（未発表）が基となっている。

